

東日本巨大地震に遭遇しての報告

郵産労東北地本副委員長
仙台支部気仙沼分会 遠藤寿雄

宮城沖地震は数年のうちに到来すると言われていたが、これほど想像を絶する巨大地震と巨大津波がくると誰が予想しただろうか。気仙沼市は、地震による倒壊家屋などは殆んどなく津波による被害でした。また、埋立地に作った油の貯蔵タンクの倒壊による油流失で、湾岸全体が大規模火災になりました。市街地は瓦礫の山と化し、所々に大型漁船が打ち上げられている。海に近い所で残っているのは土台だけ、建物は殆んどない。高台でも波が押し寄せ行方不明の方が何人もいます。リアス式特有の湾の奥の地域は、特に被害が甚大で全滅、非難場所に指定された所も流された。

私は、地震があった日は休みで10分前に魚市場から買い物し高台にある大型店にいたので、強く長い地震には驚いたが無事帰宅、家屋にもそれほど被害がなかった。電話も携帯も不通で職場の状況が判らず、翌日朝8時ごろ職場に行くと、多くの社員が帰宅できずに支店で一夜を過ごしていた。

局舎の状況は、気仙沼支店は道路から1mは高くなっているが床上浸水20センチ、大谷集配センターは全滅、郵便局は5局、簡易局1局が全滅しました。郵便局で非難生活を送っているのは事業会社社員13名、局会社社員3名います。帰宅できない社員と当日出勤した社員で、前日新仙台支店から来て戻れないでいた運送便に、前日集配した郵便物を載せ10時ごろ出発させた。その後、浸水した海水の除去、駐車場の瓦礫整理と泥の除去を行い休息していた所に、唐桑地域を配達していた5人が戻ってきた。避難所に一泊し、翌日15キロ線路沿いを歩いてきたそうだ。無事に戻ってきた5人を大きな拍手で迎えました。また、翌々日に支店に戻ってきた社員は1名でした。

家族が行方不明になっている社員、家屋が流失した社員、ガソリンが不足して帰宅できない社員など被害が様々な形で表れ、当面は、身内の捜索、避難場所の確保、家屋の被害の補修などを優先して行動し、被災の軽い社員だけが出勤することを確認しました。

16日10時ごろ、仙台出張で11日夕方から音信不通だった支店長が戻ってきた。17日から新仙台へ運送便を1日1便で運行していくことを決定、それまで集めた郵便や特定局から送付できなかった書留、ゆうパックなど新仙台支店によりやく運んでもらうことができました。17日は、新仙台から書留と速達のみが1週間分到着、小包は地震翌日から到着無し、引き受けも停止。回収できるポストの収集、可能な範囲で滞留している書留の配達（特に現金書留・受験郵便、採用通知郵便を優先）、配達可能・不能地域の調査、避難所の住所確認。

22日からは、滞留している普通郵便も配達。避難所住民の住所確認の開始、ゆうゆう窓口の引き受け・交付を開始（8時～20時まで）。ヤマトが引き受けを開始した情報をうけ、被災した全支店で窓口を開いたようです。

貯金・かんぽは、貯金の非常払いは15日から開始、かんぽの貸付は実施していません。ほとんどの会社が流され、働く職場もなく、住む家もない中で復興するまで何年かかるものなのか予想もつかない状況です。

私たちが出来ることは、被災した方への心温まる励ましの言葉を綴った多くの郵便を1日も早く届け、明日から生きる勇気と元気を出してもらうことだと思っています。

被災後、『ザ・「郵政公社」阪神淡路大震災時の有村さんの記事』を読み直し「4時間かけて出勤したこと」「10キロを歩いて通ったこと」など神戸のみなさんの経験を、郵便課職員の打合わせに使わせて頂きました。8キロを歩いて出勤してくれる月給社員、ガソリンが無く自転車で10キロ通うという女性社員など、可能な限り頑張ろうという気持ちを分かちあい、復興に一歩足を踏み出しています。

全国から支援物資がたくさん届き、忙しくなりましたが、多くの国民の皆さんの心温まるご支援に心から感謝申し上げます。